

西京二三条保小考

貝 英 幸

〔抄 録〕

本稿では、洛中周縁部「洛中周辺地域」の地域様相の実態説明の手がかりとして、北野社領（北野社領西京）の検討を行う。室町戦国期の同社領のなかでも、門前所領は重要な所領の一つであり、主には上下保と二三条保の二つが確認される。しかし、応仁文明の乱後には、そのうち二三条保で不知行化が進行し、領主北

野社の支配は西京上下保を専らとするようになる。本稿では特に二三条保の不知行化の様子を確認し門前所領の実態、その原因や背景として考えられる同社組織の問題を検討する。

キーワード 西京、伊勢氏、御供、京兆家、曼殊院門跡

はじめに

前近代における京都は、中世後期には上京・下京という二つの都市を核とする結合都市であったことが知られている。当該期における「洛中」は狭小であり、一般に「京都」ないしは「洛中」として認識されている範囲とも相違していることは周知の通りである。

これまでの戦国期京都の研究を概観するとき、成果の多くは洛中に関する膨大な研究と京郊村落など京都を取り巻く洛外を対象としたも

のであることに気づくが、一方で洛中と洛外の間にあたる地域、すなわち「洛中」の外縁部について、それ自体を取り上げ検討したものが多くないことにも注目せざるをえない。当該地域は、「洛中」に近接する一方で京都郊外に広がる京郊村落とも性格を異にするが、その理解にはいくつかの課題が残されているように思う¹⁾。

その一つとして、かかる地域（ひとまずここでは「洛中周辺地域」とする）がどのような過程を経て形成されたのかという問題は、当該地域の特性を考えるうえでも、また室町戦国期における京都を考える

うえにおいても重要な意味を持つだろう。

そこで本稿では、こうした問題を考える足掛かりとして、洛中に近接する「洛中周辺地域」の地域様相の実態解明を目的に、西京地域を取り上げ検討する。

西京地域は衰退し農地化した平安京の右京部分（厳密には右京北部）に該当し、当該地域では北野社領（北野社領西京）の展開がみられることを重要視するが、同社領は莊園制が衰退していく中世後期にあつて、なお同社の重要な所領の一つであり、室町期には、上下保と二三条保とに別れ、そのうち二三条保については不知行化が進行し、領主北野社の支配は西京上下保を専らとするようになっていく。特に二三条保の不知行化の様子は、当該期の同地域を考えるうえにおいて重要な意味を有しているだろう。

御供の下行

西京二三条保は、長享二年（一四八八）の段階において次のような状態にあつた。

さりながら西京二三条御門跡様ニ御知行候者、三句（旬）御供事にて候間、自此方可仰付候、是令者伊勢へ落とられ候て、御門跡さまにハ無知行候、三句之御供せいしゆふより下行にて候、⁽²⁾

社務職領であつた二三条保について、同保を直接管轄する目代盛増は伊勢氏によって「落とられ」たと記している。後述するような事情を考えれば「落とられ」との表記は多分に誇張を含んだ表現であり、

単なる押領とも異なつていたと思われるが、ともかくは、伊勢氏の知行によって竹内門跡の二三条保に対する権限が実行できない状態に陥つており、同保が負担すべき「三句之御供」も未進の状態に陥つていたとみてよい。ただし、ここで注目したいのは、こうした事態により二三条保に賦課されていた「御供」が、伊勢氏の下行によってまかなわれる何とも奇妙な状況を生じさせていた点である。

この伊勢氏による西京二三条保の知行については、延徳二年（一四九〇）から翌三年にかけて、北野社と伊勢氏の間で行われた交渉によつてその詳細をうかがうことができる。少々煩雑ではあるが事情をたどつてみる。

延徳二年三月十七日に発生した土一揆の社頭閉籠という一大事件は、穏便な解決を目指す松梅院と、武力による鎮圧を目指す幕府との間で交渉が続けられた。松梅院禪予は粘り強く交渉を続けたが、結局のところ交渉は不調に終わり、二一日に至り一揆勢による拝殿への放火、社頭炎上という惨事へと発展した。⁽³⁾

この社頭炎上からほどなく、同年八月に松梅院から門跡に対し次のような申し入れがなされている。

一就炎上御供雑具令紛失之条、為門跡可有沙汰由、承仕中申間、其旨以目代申入処、御供料所二三条保事、^(伊勢氏)勢州知行上者、於御門跡者、不可有御存知由、被仰者也、殊為社務勢州被仰旨如何⁽⁴⁾

右は、北野社焼失に伴い紛失した御供雑具の補填について述べたもので、松梅院禪予は、炎上により紛失した御供雑具について、御供料所である二三条保を勢州が知行している以上、伊勢貞宗に問い合わせ

てはいかがかと述べているのである。

これにより、先述した長享年間の二三条保の状態が依然として継続した状態にあることだけでなく、本来は二三条保の管理に関わりのないはずの松梅院までもが、状況を問題視し始めていることがわかる。

もちろん松梅院も、一応は承仕中の意見とすることで自らの意見の表明という形を避けてはいるものの、おそらくは後述するような門跡の態度に対して禪子の助言的な意味合いも含まれていたであろう。

実は、この御供雑具については、それより先の七月の時点で、実際に御供の調進にあたる八嶋^⑤が松梅院へ問い合わせた結果として門跡に注進が行われている。その時点での松梅院と門跡の返答は次のようなものであった。

八嶋はまず最初にこの御供雑具の取り扱いについて松梅院に問い合わせたようで、それに対し松梅院は「西京ノ参春ノ御供ニ付候て御沙汰アル事ニテ候間、御門跡様へ申入候へ^⑥」と述べている。

これをうけ八嶋は目代盛増に門跡の意向を尋ねた。

御供御タク^(道具)の事申され候、西京二三条ヨリ三春ノ御供者参候、

二三条者、セイシウ一エンニワウリヤウ申され候て、御門跡様ノ御手に入不候、殊更御供事も彼方ノ代官ヨリ渡候間、三春ノ御供付候てスル事ナラハ、イセ殿江申されへき由御意候^⑦

問い合わせは御供雑具の取り扱いだったものが、返答では御供そのものの取り扱いへと変わってしまったのはともかく、門跡の返答は、二三条保が「セイシウ」つまりは伊勢貞宗によって一円押領されている以上、御供に関しては伊勢方の代官が考えるべきことであり、

伊勢氏に問い合わせるべきであるというものであった。とはいえここでの「イセ殿江申されへき由」の具体的な内容は明確ではなく、盛増が翌日の記事に「ツイニ御沙汰候はんする由ナシ」と記しているところからも、門跡の返答は投げやりなその場しのぎのものであったであろう。

先にあげた松梅院禪子の発言は、こうした事情のもと記されたもので、門跡に対する助言であったとみてよいだろう。

この禪子の助言を容れた門跡は、八月一〇日になって、伊勢氏方に「三春ノ御供タクノ事」について問い合わせを行っている。

御供等之事、其方ヨリ御下行候間、早々被仰付候ハ、尤可然候、此間御供も御たうく事カケ候間、しか／＼と不参候由被仰候^⑧、

これに対し伊勢氏方の返答は「御供御タク以下、此方ヨリ可申付由承候、一向此方ニハ覚悟なく候、いかさま古老物相たつね、重而御返事可申由申さるゝ^⑨」であった。本当に事情が了解されていなかったのか、それともごまかしの返答であったのかははっきりとはしないが、門跡側にとって芳しい返答でないことは明らかである。

これに続き一六日にも、再び伊勢氏方に申し入れが行われているが、伊勢氏方の返答は次のようなものであった。

備中ニ相尋候へハ、御供御たうく以下事、此方ヨリ申付事、一向不存候、乍去ミナ河のイカ申す者、西京ノ代官ヲ久敷モチタル人ニテ候、此物ニモ相たつね候へ共、一向此方ヨリ御たうく以下仕タル事ナク候由候間、更ニ不存候分御返事候^⑩、

問い合わせをうけた伊勢氏も、前回の問い合わせ以降、伊勢氏の縁

者や西京代官「皆川伊賀」なる人物に聞き取り、問い合わせを行うなど事実の確認をしたようで、いずれの者も門跡の主張する伊勢氏による御供雑具の費用負担の例は存ぜずとの回答であった。伊勢氏よりの返答はこの趣旨を軸にしているのであろう。

こうした事態に変化の兆しがみられたのは二九日になってからであった。

松梅院禪予が門跡に注進したところは次のようなものであった。

八嶋ヨリ庫殿（伊勢兵庫（伊勢貞職）江、御タウクナキニヨンテ

御供不参候、御門跡様ヨリ其方へ御使ヲ被立候へ共、御返事もなく候よし候て御供をさへ被置候、近比神慮もモンタイナク候、其方ヨリ御たうく以下被仰付候はんする共、又中々御存知アル間敷候共、一通御返事ヲ御門跡さまへ御申候由内儀以八嶋ヨリ庫殿へ届候申候⁽¹¹⁾

伊勢氏方からの返答が無いことにより、御供が社家によって差し押さえられていることや、神慮を慮る必要があることなどをあげ、門跡の意向を容れるにせよ拒否するにせよ、伊勢氏方から返事を求めたいとの内容であった。おそらくは、事態の膠着を心配した松梅院が、八嶋を通じて伊勢氏方に内々に申し入れの便宜を図ったものと思われ、返答の内容よりも返信を求めることに重きが置かれている。

御供の差し押さえについては、同月一日条によって、前日の伊勢氏よりの返答をうけてか、門跡方より「御タウクノ事付候て米渡候」という対処がなされたものの、不明瞭な解決を避けるためか、事態の進展を促すためか「奉行（御供を）御をさへ候」という措置がとられ

ていた。⁽¹²⁾

これに対し伊勢氏は、八嶋からの懇ろな申し入れに感謝しつつも、「御供を社家ヨリをさへ被置候ても御公事ランキヨアルマシク候、先八嶋ヨリいかヤウニモ御たうくりヨウケン候て御供をまいらせられ候て可然候」と返答した。社家によって御供を差し押さえたとしても、それは問題の解決につながるものではなく、八嶋が御供雑具をやりくりしたうえで御供の社納を優先すべきである、という極めて合理的な考えであった。

伊勢氏は翌晦日にも使者を遣わし「御供のキモツノ事」に関して返答したが、伊勢氏方の考えは「我らもくわしく無覚悟候間備中二相尋候へハ、一向此方ヨリ申付候事不存候」とこれまでと同様の主張を繰り返しただけでなく、「いか、御座候哉」と、むしろ北野社側に判断を迫るものであった。⁽¹³⁾

この結果をうけようやく事態は沈静化に向かう。「目代日記」閏八月一日条には次のようにある。

御供タウク事付候て社家ヨリをさへられ候へ共、八嶋と庫殿申合御公事重而ラツキヨ可スミトテ御供参候、

二三条保が負担すべき御供雑具について、八嶋と伊勢貞職との間で申し合わせが行われひとまずの解決が図られたことがわかる。しかし、前日の時点では門跡の意向は「先年二三条此方ニ御知行時も西京ニ御代官ヲ定置候て御供以下社家江被渡候、并キモツ等事も彼任所ヲ其方ニ御知行候上者、其方トシテ御沙汰はんする事マカハス候」であり、当初の意向から変化しているわけでもない。結局の所は実際に御供の

調進にあたる八嶋による現実的な対応によって問題が先送りされただけということになる。

段銭の賦課

前節では、西京二三条保が伊勢氏の管轄するところとなり、御供はおろか必要な器物の費用さえも捻出に苦慮した様子をみてきたが、その間の「目代日記」からは同保に関して緊迫した様子はうかがえないばかりか、自らの支配が依然として継続しているかのような状況が記されている。

八嶋屋修理料段銭事、田一段別式拾定 島一段別三宛 ○ 宛巷所一段別四拾

疋宛、来十五日以前可執沙汰旨可被下知二三条下司之由被仰下候也、恐々謹言、

壬八月廿三日

法橋中祐

政所法印御坊

右の奉書では、八嶋屋修理段銭が西京二三条保に対して賦課され、同保下司を通じて貢納すべきことが伝えられている。同日には西京上下保についても、ほぼ同文の段銭催促の奉書が発給されているところから、修理段銭そのものは西京全体に対して賦課されたとみてよからう。

この修理段銭の賦課の命に関して、西京側の反応は素早く、二五日には西京上下保沙汰人が「段銭之事佗事罷上」ったのを皮切りに、九月二日、七日にいずれも上下保から沙汰人が目代のもとを訪れている。

このうち二日には「二疋」を持参したものの認められず、ようやく七日になって「壹段二十疋定御免候て、又相残来年めされ候て被下候へと色々御佗事申さるゝ」とある。これ以後、修理段銭に関する記事は見られないことから、決着したのであろう。

ただしこの修理段銭の免除、減額の要求はいずれも上下保の沙汰人によって行われたことには注意が必要である。「目代日記」には二三条保の関係者と思しき者の記載はないものの、「目代日記紙背文書」および「杜家引付」の別の記載から詳細が判明する。

(a) 廿三日 一、御門跡様ヨリ西京へ八嶋段銭之御教書如此二通なされ候、但御教書を御門跡様ヨリ松梅院へ御出候て(以下欠)⁽¹⁴⁾

(b) 一西京上下保江、為御門跡八嶋屋修理料段銭事被懸御教書在之、同目代・公文承仕申付被相触也、但目代者政所承仕代云々⁽¹⁵⁾

門跡による八嶋屋修理段銭は、先に見た奉書にもあったように二三日即日手交された。目代盛増、松梅院禪予が共に記すように、門跡から彼らにそれぞれ西京に対する修理段銭の催促が仰せつけられており、奉書(御教書)は公文承仕、政所承仕の代役である目代が受け取っている。

次いで、文書を受け取った目代盛増は、成孝とともに西京へ向かい御教書の内容を仰せつけたようである。

公文^{承仕}せうしをめされ、西京へをふせ付られ候へと御門跡ヨリおうせ出され候、其時成孝・目代兩人御教書もち西京へ下、両沙汰人へ一通つ、付也、但公文せうしと政所せうしと兩人して付事にて候へ共、政所せうしなく候間目代召候、西京上下保沙汰人おふか

た也、二三条の政所へ此間（^{吉積}）はよしつミにて候へ共、政所をあけ候間、和（私）者しらすとて御教書を出へく候、⁽¹⁶⁾

この記事より、西京上下保については沙汰人に御教書の内容が通知されたものの、二三条保については御教書の内容を仰せつけようにも当該の人物がいなかったことがわかる。おそらくは御教書に記された「二三条保下司」に仰せ付けようとしたのであるが、「目代日記紙背文書」延徳二年閏八月二五日条には、「西京政所なく候」との記載とともに「となたへ付候はんする哉」と記されている。所領管理の拠点たる政所もなく、担当する者もないという状況は、段銭の催促が名ばかりであったといわざるをえないだろう。

これ以後「目代日記」では先述した通り、上下保の沙汰人が佗事として目代の許を尋ねる記事ばかりで、二三条保についての記載はみられない。

ところがその後しばらくたった一〇月以降、「杜家引付」には二三条保に対する修理段銭に関する記事が散見される。

(c) 今日濱豊後守被申様者、西京二三条保段銭事、加藤方佗事間、以目代御門跡へ申処、難去雖被思召候、為方々申間、引懸御難儀之条、御領状難有由被仰之間、則豊州二申者也、⁽¹⁷⁾

(d) 一、松梅院ヨリ西京段銭之事次候て、ほそ川との御内物二か藤と申物候か、西京二地をもち候分、大一所小一所の段銭を御めん候て被下候へと色々和をゑん二取、御佗事申候間、御めん候ハ、をのかせ候申され候、御門跡様ヨリ返地の分申され候分くわしくきこしめし入れられ候、さりなから此間も方々ヨリ佗事仕候へ共、御

せういんなく間、さ様のひんかけもいか、とおほしめされ候間、かなふましく候由返事、そうしや国分殿也、⁽¹⁸⁾

右にあげた記事より、二三条保内に所領を有する加藤なる人物から佗事が伝えられたことがわかるが、ここで段銭の免除を求めた加藤なる人物は細川政元の縁者であったようである。門跡側は対処に苦慮した様子で、「此間も方々ヨリ佗事仕候へ共、御せういんなく間」を理由に、ひとまずは「かなふましく候」と返答し要求を退けた。

しかし免除の要求は収まらず、翌月には松梅院に対して
一 自京兆為波浜承、西京二三条保段銭、御被官加藤方下地在之、仍先々も段銭為免除之間、以其旨御門跡江可申達由、書状在之、⁽¹⁹⁾
と、今度は細川氏内衆である波々伯部氏から申し入れが行われ、結局のところは

一 以公文承仕、西京二三条保江加藤下地已下段銭事、先可止催促由申付者也、然処、以目代、今度計者段銭事為右京大夫殿御申之間可被閣由、可申入旨被仰出候間、即波兵江申者也、⁽²⁰⁾

と、細川政元の意向であることを理由に段銭の免除を認めざるをえなくなり、その後加藤方からは幾度か段銭免除の礼が贈られている。⁽²¹⁾

しかしこの門跡側が取った段銭免除の措置については、境内観音寺（朝日寺）からは「西京二三条保段銭毎度免許云々、於証文者、先年寺家炎上之時令焼失、其故西京下司存知仕由、以目代申入候処、今度之儀者、不可有御承引之旨、被仰出也、⁽²²⁾」と苦言を呈されている。この観音寺の発言自体も二三条保の状況を顧みたものではなかったとはいえ、この一連のやり取りが門跡側の独断で行なわれたことがわかる。

不意の返弁催促

十一月廿八日

貞通判

(齊藤) 玄茂同

松梅院

延徳元年(一四八九)三月、松梅院は伊勢氏被官の三上員光から文正元年(一四六六)の借錢の返弁を求められた。しかし禪子はそうした借錢の存在を全く存知していなかったようで、三上方と交渉にあたったものの、ついに同年十一月には、幕府から次のような「奉行人連署奉書」が発給されるに至った。

三上越前守景光申去文正元年借錢事、如元当院帰住之上者、任借状已下証文旨、以知行分社内領、本利相当之間、可被究返之由被仰出也、仍執達如件、

「延徳元」

十一月廿四日

(諏訪) 貞通判
(清) 元定同

松梅院

幕府の裁定は、三上氏の主張を認め、証文の内容に従い社領のうち松梅院の知行分をもつて返弁に充てよとの命であったが、禪子はこの幕府の裁定に、「縦雖有借状、料足儀曾不請取問、不可致承引由、此間連々及問答也、堅可達上聞者也」と不満をあらわにしている。

しかし幕府の裁定はこれに止まらず、その四日後にはこの借錢に関して追加の裁定が下された。

三上越前守員光申去文正元年松梅院借錢事、以彼知行分西京内家嶋^{号御所内}并新御寄進地子等、本利相当之間、員光可致収納之由被仰出也、仍執達如件、

ここで幕府は、先に返弁を命じた借錢について、西京内の家嶋(八嶋)および新御寄進地の地子をもつて本利の返済に充てることとし、三上員光本人が収納にあたるよう命じたのである。

長享元年、禪子が再び松梅院院主となった後、禪子は過去の借錢の返弁を複数要求されたが、それらの多くは禪子が松梅院院主に就く以前の院主のものであった。⁽²³⁾ その意味ではこの借錢も同様のものではあろうが、借錢への年貢を充当するのみならず、返弁に充当する所領まで指定した命令は異例である。奉行人連署奉書の発給が立て続けに行われている点からみても、錢主である三上氏側による幕府への強い働きかけが推測される。

この例は、借錢の「抵当」として所領支配に他者の関与を認めるものであり、この後の知行に大きな影響を及ぼしたと思われるが、これと同様の例が門跡領に影響を及ぼすこともあった。

一、十七日、能椿ヨリ御門跡様江注進申され候子細者、今日ヤストミ殿ヨリ我らか処江御使者サイ^(齊藤)藤修理ト申人中間被下候てうけ給候事者、竹内御門跡さま江此方ヨリ借錢を口入申処ニ、此間堅サイソク申候へ共御返弁なく候、御門跡さまヨリ此方へ被仰出候事者、北野内ニ湯田申地子を此方へ沙汰仕候下地在之、彼代官承仕能椿申物被仰付候処ニ、此二三ヶ年松梅(院)ヨリ一社のクモツトカウシ、代官前地子事^(マ)錢をさへ御門跡さま不参候、近比曲事、

彼能椿前預申用要ヲ借錢方へ被入候間、早々此方へ可有執沙汰候由堅申され候、近比迷惑由注進候⁽²⁴⁾、

右は、門跡へ承仕能椿が注進したもので、それによれば、能椿は京兆家内衆安富氏より借錢の返済を求められたが、その借錢は安富氏の主張では、安富方が口入した借錢の返弁がないため門跡に催促したもの、門跡は、「北野湯田」の地子を以てそれに充てたいが、湯田を管轄する能椿が地子錢を押さえていると答えたというのである。おそらくは湯田を管轄する能椿が突然に借錢の返弁を求められたことにより、錢主である安富氏が主張する門跡の言い訳を確認すべく注進に及んだものであらう。

借錢の返弁に所領の地子を引当る問題は、この後、意外な展開をみせる。

一、廿五日、御門跡様へ能椿ヨリ注進申され候、今日松梅院へ我らをめされ候て被仰候子細者、湯田地子錢事、細川殿御フクロ様ヨリ御口入候て、此方のけいほうをヤメ候へ由御意候、内々先御門跡様江御きやう代可参候心中にて候、内々其覚悟仕候へ由被仰候、目出度候と申さるゝ、此由ミンふきやう殿へ申候⁽²⁵⁾、

右は、先に安富氏から返弁を求められた借錢に関して、松梅院が「湯田地子錢事、細川殿御フクロ様ヨリ御口入候て、此方のけいほう（競望）をヤメ候へ」と述べたのである。これにより先の安富氏の主張にあった湯田の地子を押さえていたのは他ならぬ松梅院であり、しかもその理由として松梅院は細川政元の母の口入をあげ、これ以上の詮索を止めるよう述べたことがわかる。

その後二八日には再度安富方から催促があり、それにより借錢は総額で一八貫文にも及ぶことが判明するが、そこでは湯田の地子は松梅院によって「横領」されていたことが判明する⁽²⁶⁾。

とはいえ、松梅院による地子の横領については、明確な対処もないまま、翌月には湯田の地子を直接に管轄する能椿らが、安富方に佗事に出向くこととなった。

一、七日、井上新左衛門殿江湯田佗事二成悦・能椿・目代同道二仕罷出候、色々佗事申され候へ共御承引なし、但十五年未進を是未進を皆済させられ候はんする由被仰出事也、廿貫文ニテ佗事申され候へ共御承引なく候、同八日又三人罷出候、卅貫文ニテ佗事申候、いかさま申さるゝ分を御披露候て御返事候はんするよし新左衛門殿仰被候⁽²⁷⁾

おわりに

これまでの、西京三条保をめぐる延徳二年から三年にかけての検討を通じて、判明した点を指摘しまとめに代えたい。

まず二三条保に対する竹内門跡の支配は、御供調進に必要な御供雑具をめぐる問題にみられたように、現実の状況を勘案することないかたくななものであった。所領を押領したはずの伊勢氏方から現実的な対応が提案されたにもかかわらず、門跡は態度を変化させることなく、すべての問題は曖昧に処理され、結局のところは八嶋と伊勢氏との調整により辻褄が合わされるだけであった。「押領」という言葉とは裏

腹な対応といつてよいだろう。

一方で二三条保の支配体制は、二三条保は伊勢氏や細川氏の縁者により所領が切り分けられ細分化した状態にあり、北野社が領主として支配を貫徹することは到底かなわない状況にあった。こうした状況は二三条に限った問題ではなく、北野社全体が抱えた問題でもあったが、あえて二三条保に限定するならば、二三条保では所領管理の状態を把握する者が誰もいないという状況に陥っており、細分化した領主毎に段銭の減免を求められ、その是非をその都度判断するという場当たり的な対応に終始せざるをえない状態になっていた。

こうした背景には、松梅院院主をめぐる混乱をはじめとする社内組織の動揺があげられるが、歴代の松梅院院主や門跡が個別に抱えた借錢など、応仁文明の乱前後から積み重なった問題が一気に吹き出し、北野社全体の運営に影響を及ぼしていたといわざるをえない。

〔注〕

(1) 当該期の山門や北野社に関しては、下坂守氏や三枝暁子氏に代表される山門組織に関する研究成果（下坂『中世寺院社会の研究』〈思文閣出版、二〇〇一年〉、三枝『比叡山と室町幕府・寺社と武家の京都支配』〈東京大学出版会、二〇一一年〉など）、あるいは瀬田勝哉氏・佐々木創氏らによる北野社組織に関する研究成果（瀬田『増補』洛中洛外の群像・失われた中世京都へ〉〔平凡社ライブラリー、二〇〇九年〕、佐々木『中世北野社松梅院史の「空白」―松梅院伝来史料群の批判的研究に向けて〕（『武蔵大学人文学会雑誌』三九（二）号、二〇〇七年など）があるが、それらは主には山門や北野社の寺社組織の解明を指したものであり、本研究がねらいとする室町期西京の地域の実態や

特徴を考えようとしたものではない。

- (2) 「目代盛増日記」長享二年四月七日条、同年九月三日条（以下、同日記よりの引用は「目代」と略し条文の年月日のみを記す。）
- (3) 「社家引付」、「目代」延徳二年三月一七日条から二二日条にかけて
- (4) 「社家引付」延徳二年八月二日条
- (5) 北野社御供所八嶋屋については、高橋大樹「中世北野社御供所八嶋屋と西京」（日次紀事研究会編『年中行事論叢』二〇一〇年、岩田書院）を参照されたい。
- (6) 「目代」延徳二年七月八日条
- (7) 「目代」延徳二年七月八日条
- (8) 「目代」延徳二年八月一〇日条
- (9) 「目代」延徳二年八月一〇日条
- (10) 「目代」延徳二年八月一六日条。文中の「備中」について、『北野天満宮史料』は幕府奉行人である清秀数とし、『大日本史料』は伊勢貞陸とする。明確な判断の材料を持ち合わせていないが、伊勢氏への問い合わせということを考えれば『大日本史料』の方が妥当なように思われるが、ひとまずは保留しておく。
- (11) 「目代」延徳二年八月二九日条
- (12) 「目代」延徳二年八月一日条
- (13) 「目代」延徳二年八月晦日条
- (14) 「目代日記紙背文書」延徳二年閏八月二三日条、以下「目代日記紙背文書」よりの引用は「紙背」と略し年月日のみを記す。
- (15) 「社家引付」延徳二年閏八月二四日条
- (16) 「紙背」延徳二年閏八月
- (17) 「社家引付」延徳二年一〇月一九日条
- (18) 「紙背」延徳二年一〇月一九日条、『目代日記』では同年九月に比定しているが、内容から考えて一〇月のことと思われる。
- (19) 「社家引付」延徳二年一〇月五日条
- (20) 「社家引付」延徳二年一〇月七日条
- (21) 「社家引付」延徳二年一〇月一四日条、同年一二月一日条

- (22)「社家引付」延徳二年一月一四日条
- (23)寛正六年の禪親失脚以降、長享元年までの間に松梅院院主は、禪予、阿賀丸、禪椿、そして禪予と交代したが、その詳細については拙稿「松梅院禪予と宮寺領の回復―所領目録の作成を例にして―」（日次紀事研究会編『年中行事論叢』、二〇一〇年、岩田書院）を参照されたい。
- (24)「目代」延徳二年一月一七日条
- (25)「目代」延徳二年一月二五日条
- (26)「目代」延徳二年一月二八日条。ただし、湯田の地子は行水の費用に充てられていたが、そもそも地子だけでは費用をまかえず、さらには地子を松梅院が横領していたことが述べられている。
- (27)「目代」延徳二年二月七日条

（かい ひでゆき 歴史学科）

二〇二〇年十一月十六日受理